んと三人で、樂しく公園でお花見が出來たのにねエ。喜久子さん！　貴女も一所にあやまつて下ださいよう！

（喜久子）……では耶須子さん！もう堪忍してあげて頂戴な！

（耶須子）エ、〳〵！それぢやアもう堪忍して、これから一所にお花見に行きませう。

（喜久子）だつて貴女その足では……

（登美子）いゝ事よ！　私、いくらでも杖に成つたげるワ。さ、喜久子さん代りませうよ。

（喜久子）いゝえ、やつぱり私の方がいゝでせう。

（登美子）何故そんな事仰有るの？

（喜久子）でもこの病氣に成ると、以前仲の好かつた者ほど、尙氣に障る樣に成るんですつて……

（登美子）まア、變な病氣ねエ……

ト、まだ合點の行かぬ體、お多代はもどかしがつて、側へ來て袖を引き、

（お多代）もう好い加減に聞いてらつしやいましよ！

（登美子）お前は引込んどいて！　耶須子さんの歩るくお邪魔ぢや無いか。

（お多代）ホ、ゝ、私いつそあのお身足で、蹴飛ばしていたゞき度う御座いますよ。

（登美子）何を云ふんだね、此の人は！

（お多代）お嬢樣こそ、まだお解りに成らないんでせうかねエ。――貴女、今度は此方が擔がれてらつしやるんですよ。先刻の御返禮なんでございますよ。

（登美子）えッ、さうか知ら？

眼を圓くして耶須子を見つめる。耶須子は自分から登美子の肩に手をかけ、

（耶須子）登美子さんが杖に成つて下さりやア、もうこんな物要らないワ。ト、松葉杖を棄てゝしまふ。登美子驚いて、

（登美子）アラそんな事していゝの？

（耶須子）いゝんですとも……もうすつかり快いのよ。これ此通り！ト登美子を放して足踏を二三度して、

（耶須子）さ、もうダンスでも何でもするワ。

と、跳ねてまで見せる。お多代は笑ひ出す、登美子はあきれて、

（登美子）アラ、……それぢやア嘘なの？

（耶須子）御免なさい！　先刻の遺趣返しよ。

（登美子）まア、いやだ！　多代や！　やつぱり此方がかつがれちまつたのよ。

（お多代）それ御覽遊ばせな！　だから先刻も傳染病だなんて仰有つたんで御座いますよ。

（登美子）何故これが傳染病なんだらう？

（お多代）でも考へて御覽遊ばせな！　貴女の遊ばした樣な事を、彼方でもなすつたぢや御座いませんか。

（登美子）ホヽヽ、それぢやアやつぱり傳染病なんだねエ。それにしても耶須子さん！

（耶須子）何です？

（登美子）貴女も私の氣をお引きなすつたの？

（耶須子）いゝえ、それほどでも無いんですけども、只貴女の眞似がして見たかつたの！

（登美子）喜久子さんまで一所に成つて、酷いのねエ。

（喜久子）私も一寸眞似をした斗りだワ。ても考へて御覽なさいな！　仲好しつてものはお互ひに、いろんな眞似をしあふものよ。又眞似をする氣ぢや無くつて、段々癖のうつるものだワ。

（登美子）ほんとにさう云やァそれもさうねェ。

（喜久子）だからこの四人は、もう皆仲好しなのよ。

（登美子）そのつもりてさァ行きませうよ。

（耶須子）ぢやァ一寸待つて下ださい！　今繃帶を外づすから。

（喜久子）ホヽヽ、さうでしたねェ。取つたげませう。

（耶須子）自分で取るからいゝのよ！

（登美子）いゝえ、私が取る番だワ。

（お多代）まァ、私もお手傳致しませう。

と、三人爭つて、耶須子の足の繃帶を外づしながら、又互ひに顏

を見合はせて、

（耶須子）ほんとに皆……

（他三人）仲好しだわねェ。

考へ物

場所　皆代住居の一室

人物
- 母、皆代
- 娘　路子
- 姪　幡子
- 同人友達　弘子
- 下女　お七

路子は座敷の机に憑れて、雑誌を見ながら考へて居る。幡子は縁側に腰をかけ、新聞を見ながらこれも思案して居る。

（路子）……ほんとに難かしいこと！　こんな考へ物ッて見た事ありやしないよ。

（幡子　新聞のある點を指しながら獨語）　此所よ！　いつも美術會の出てる所は此所よ。……アヽ、まだ出ないのかねエ？

（路子　獨語）　でも、今度こそ是非當てなけりゃ成らないワ……何うしたらいゝだらう？

ト、初めて顔を幡子の方へふり向け、

（路子）　幡子さん！　手傳つて頂戴な！　智恵を貸して下ださいな！

幡子も漸く座敷の方へねぢ向き、

（幡子）　何なの？　路ちゃん！　アラ、また考へ物ッ。懸賞でせう。慾張ってるのねエ。

（路子）　アラ酷い！　賞品なんざ何だっていゝんだワ。

（幡子）　そんなら何故そんなに夢中に成ってるの？

（路子）　ても、うまく當てりやア、此所へ名前が出るんですもの。
（幡子）　その雜誌に貴孃の名が？　それ路ちやん、嬉しくッて？
（路子）　そりやア嬉しいワ。
（幡子）　まア……誰だつて同し事だねエ。けども、考へ物の解答者位で……罪が無いねエ。（ト、半分は獨り語の樣に云ふ。）
（路子）　だつて幡子さんだつて、先刻から新聞見ちやア、何だか獨りで考へてるぢやありませんか。何うしたの？……何か懸賞が出てるの？
（幡子）　そんな物ぢやア無くッてよ。
（路子）　そんなら何なの？
（幡子）　何でも無いのよ。
（路子）　アラいやだ！　そんな事云はないで、話して頂戴な！
（幡子）　いゝえ、此方の事よ。路ちやんなんぞの知らなくッてもいゝ事！

（路子）　あんまりねエ。そんな事云ふと尙聞き度く成るワ。ねエ幡子さん！何なのよウ？
（幡子）　ほんとに路ちやん聞き度がりだねエ。
（路子）　エヽ、私聞き度がりよ。そんな事云ふと、尙聞くワ。何なのよ何うしたのよ！
ト、遂に幡子の側へ來て、肩に手を推し、膝を搖つて尋ねる。
（幡子）　ほんとに困つちまふねエ。私逃げるワ。
ト、立とうとするのを、袂を控へて動かせず、
（路子）　云はない中は此所放さない事よ。サ、云つて頂戴！
（幡子）　ひつッこい路ちやんだ。
（路子）　どうせ私はひつッこいワ。つかまへたら放さないワ。雷樣が鳴つたって。

（幡子）オヽ、恐い！……恐いと云やァ……ほんとに叔母さんに知れると大變なんだから……

（路子）ぢやァ阿母さんにやァ云はないから。

（幡子）屹度？

（路子）エ、屹度！

（幡子）そんなら話すけども……、屹度誰にも云つちやいやよ。叔母さんなんぞに云はうもんなら、それこそ大變なんだから。

（路子）エヽ……大丈夫！　それで何うしたの？……アラ、また默つちやつて……

幡子は又新聞を見入りながら、

（幡子）アノ……もう新聞に出やしないかと思つて……

ト、やゝ笑を含んで、得意さうに云ふ。路子は却つて心配さうに、

眼を圓く見張りながら

（路子）まァ、ぢやァ何か惡い事したの？

（幡子）誰が？

（路子）幡子さんが！

（幡子）Ⓢ酷い事云ふ路ちやんだ。惡い事どころか、――私……好い事したの！

（路子）好い事ッて……人に褒められるやうな事？

（幡子）まァ然う！

（路子）そんなら解つた。アヽ解つた。

（幡子）ぢやァ何だと思つて？

（路子）解つてるワ。――幡子さん叔母さんに内證で、郵便局の貯金出して、水害の慈善に出したんてせう。

（幡子）　オホ、、、違ふワ〳〵、そんな事ぢや無いワ。
（路子）　ぢやア何？　何うしたの？
（幡子　少しく聲を低めて）路ちやん知つてるてせう。上野に展覽會のあるの。ソラ、美術展覽會の。
（路子）　エ、、知つてるワ。けどもまだ來月からてせう。
（幡子）　さうよ。それてあの展覽會へ、私一枚出したのよ。
（路子）　アラ何時？
（幡子）　ちつとも解らなかつたてせう。
（路子）　少しも知らなかつたワ。何様な畫？　何時畫いてたの？
（幡子）　自家で畫くと知れるから、先生ン所の畫室て斗りかいて、ちつとも自家へ持つて來なかつたんだワ。
（路子）　まア……どんな畫？　風景？　人物？

（幡子）　そんな平凡なんぢやないワ。
（路子）　まア大變なのねエ……ぢやア何なの？
（幡子）　理想畫なのよ。尤も圖は、わざと卑近な物を選んだんだけども、題が奇拔よ。
（路子）　能書ばつかし云はないて、はやく云つて頂戴なねエ。
（幡子）　眞理と云ふ畫題て、靜物の瓜を二つ畫いたの。
（路子）　瓜が二つて眞理だつて？……むづかしいのねエ。
（幡子）　路ちやんにやア解らなくッて？
（路子）　何の事てせう？
（幡子）　瓜の蔓に茄子は實らんて事があるてせう。そりやア眞理てせう。だから……
（路子）　アハ、、、まア馬鹿〳〵しい！

ト、耐り兼ねた樣に笑ふ。幡子は却つて不興相に、

（幡子）何が可笑しいの？　路ちやんこの畫題が解らないなんて、餘程何うかしてるワ。オホ、、、、そんな事で考へ物が出來るでせうか。オホ、、、、！

ト、負けぬ氣に嘲り返へす。路子は急いで笑を止めて、

（路子）けども幡子さん！　それ叔母さんに知れちやいけないの？

（幡子）平生からあんな氣の叔母さんですもの、未修業中の私達が、展覽會へ出品したなんて云はうもんなら、それこそお目玉頂戴だワ。けども、もしひよツとあれが通つて、ちやんと會場へ掲げられる樣に成て、……それから、紛れ當りにても賞が取れりやア、もう知れたつて關はないんだけども……

（路子）幡子さんだつて慾張つてるぢやア無いの？

（幡子）いゝえ、賞なんざア何うでもいゝけども、さうなりやア新聞に出るでせう。だから私氣にしてるんだワ。毎日新聞に氣を附けてるんだワ。

（路子）ぢやアもう賞が取れるの？

（幡子）褒賞はずつと後の事だけども、會場へ出る樣になるか成らないかは、新聞で屹度解るだらうと思ふから……

（路子）まアさう……それぢやア隨分氣が揉めるのねエ。

（幡子）氣が揉めるの揉めないのッて、試驗の時よりもつと心配なものよ。

（路子）さう云やア私の考へ物だつて、學校の宿題より餘程むづかしいワ。

（幡子）宿題ッて云やア、路ちやん、此間の算術出來て？

（路子）とう〳〵出來なかつたけども、お友達に教はつて出したワ。

（幡子）また出てるんでせう？

（路子）出てたつてかまはないワ。それより此考へ物何でせう？　教へて

頂戴な！

（幡子）まア何てエの？

ト、雜誌を受取り、讀んで見る。

（幡子）『五人のお客に、五つの卵が、大きな皿にのせて出された。やがてお客は、一つ宛卵子を取りあげたが、まだ一つの卵は、ちやんと皿の上に乘つて居る。これは何う云ふものだらう？』……

（路子）ネ、變ぢやありませんか。五人に卵が五つでせう。一人が一つ宛取りあげたのに、何うしてまだ卵が一つお皿の上にあるんでせう？……むづかしいわねエ。

（幡子）さうねエ。一寸解らない事ねエ。だが……かうぢや無いでせうか。

——中の一人が食べやうと思つたら、卵が腐つてたから、また止したの……

（路子）そんなら取り上げたと云ふ譯が無いぢやありませんか。

（幡子）さうねニ……ぢやア屹度斯うよ——半分だけ食べて、半分はお皿に置いたの。

（路子）でも此所にやア一個と書いたる事よ。

（幡子）さうねエ、困つたねエ。

（路子）だから私むづかしいつて云ふんだワ。

（幡子）まアお待ちなさいよ。私うまく考へて見るから。

ト、兩人はしばらく考へ込む。

此所へ弘子庭から入つて來て、

（弘子）今日は！　お兩人で何してらつしやるの？

ト、聲をかける。兩人等しく顏を向けて、

（幡子）まア弘子さん！　好い所へ來てくだすつたわねエ！

（路子）入らつしやい。此所へお掛けあそばせな！

ト、座を設ける。弘子はまだ立ちながら、

（弘子）今日あんまりお天氣が好いから、貴女方をお誘ひに來たんだワ。

（幡子）さう、何所へ？

（弘子）上野へでも散歩に行かうと思つて……

（幡子）上野ならまだ早いワ。

（弘子）紅葉なんぞ無くッたつて、展覽會見りやいゝぢやありませんか。

（幡子）それだからまだ早いッて云ふのよ。展覽會は來月の一日からよ。

（弘子）嘘よ！　もう、十日から開いてるワ。

（幡子）ありや工藝展覽會ぢやありませんか。

（弘子）だからその事云つてるんぢやありませんか。

（幡子）アラ厭だ！

（弘子）何故？　……幡子さんこそ變な方だワ。

ト、双方睨み合ふ。路子はそれを執成し顔に、

（路子）いゝえ、弘子さん斯うなんですよ。幡子さんの展覽會は、來月の一日からなんですよ、それに幡子さんのが……

ト、云ひかけるのを、幡子は遮つて、

（幡子）路ちやん、默つてらつしやいよ。何も知らない癖に！

ト、目顏で知らせる。弘子は初から合點が行かぬが、此時漸く推量をつけて、

（弘子）ア、、何だか變だと思つたら、貴女方喧嘩してらしつたの？

（路子）嘘よ〳〵！　喧嘩なんぞしてやしないワ、ねエ幡子さん！

（幡子）さうですとも、喧嘩ぢやア無いわねエ。

（弘子）そんなら何だつて、兩人で默つて睨み合つてたの？

（幡子）　オホ、、、睨合つて、そんな事ぢや無いわねエ。
　　ト、路子を見かへる。路子點頭いて、
（路子）　エ、、こりやア斯うなの、二人で考へ物考へてたの。
（弘子）　まア馬鹿らしい。考へ物だなんて、子供見たいな事してるのねエ。
（幡子）　ホ、、、私も實はさう思つてたんですけども、何しろ路ちやんが熱心なもんだから……
（弘子）　路子さん、考へ物お好き？　不思議ねエ。私考へ物だの、智恵の環だの大嫌ひよ。
（路子）……好つて云ふんぢやありませんけども、他の方がよく當てゝ、名前を此所に出してらつしやるから、私だつて出來ない事無いと思つて……
（幡子）　そんなら一人で考へりやアいゝのに、私に智恵を貸せつて云ふんですもの……さうして巧く當つたら、名前は自分の名で出さうつて云ふ

考へ物

んでせう。……狡い人だわねェ。

（路子）　アラ幡子さん！　好い事よ！　もう教はらなくつてもいゝ事よ。

ト、雑誌を引奪る樣にして、ツンと立つて退かうとする。

（弘子）　ソレ、やつぱり喧嘩に成つちやつたワ。路子さん怒るもんぢや無いの事よ。ドレお見せなさい！　私考へたげるワ。嫌でも解らない事ア無いのよ。

（路子）　ぢやァ弘子さん！　考へて下ださいな！

（弘子）　お見せなさい！　……だけどもむづかしいなァ厭よ。

（路子）　これなのよ。

（弘子）　この卵の考へ物子。

ト、雑誌を讀んで見て、少し考へ、

（弘子）　譯は無いぢやありませんか。

（路子）もう解つて？

（弘子）この卵は斯うなのよ、屹度茹卵なのよ。だから中は食べてしまつても、皮だけちやんとお皿の上にあるんだワ。

（路子）アラ厭だ。そんなら五個とも殘つてる筈ですワ。それに一個しか殘らないつて云ふんだから、何うしても解らないんだワ。

（幡子）幡子は側から、

（幡子）他の四人は、きつと皮ごと食べたんでせう。

ト、交ぜかへす、弘子は眞顏で、

（弘子）それぢやァ斯うよ。五個の中四個茹でたつて、一個だけ生だつたの。

（路子も眞顏に成て）それなら何うして？

（弘子）で、他の四個は、剝く時みんな皮が壞れちやつたけども、一個は生だつたもんだから、ソラ、小さく穴をあけて、其所から巧く吸つちやつ

たのよ。ですからちやんと元の通り、お皿の上に乘つてるでせう。

（路子）さうねェ……さう云やァ然うかも知れないのねェ。

（弘子）屹度さうよ。だからはやく解答をお出しなさいよ。同案があると先着が勝なんだから、早く出さないと損するワ。

（路子）でも……まだ何だか變ねェ。

（弘子）ぢやァ違ふとお思ひなさるの？

（路子）もつと他に……何とかねェ……

（弘子）そんなら勝手になさるがいゝワ。折角考へてあげたのに。

ト、少し不興に成る。幡子見咎めて、

（幡子）オヤ、今度は其方で喧嘩が初まつた。

（弘子）何も喧嘩ぢやないけども、これだから考へ物嫌ひと云ふんだワ。

（幡子）ほんとに私も然うなのよ。ほんとに路ちやん、もうそんな面倒臭い

事止して、それよりお七にさう云つて、お茶でも持つて來させて頂戴な！

（路子）ハイ、只今？

ト、路子は奥へ入る。幡子は座敷に席を設けて、

（幡子）弘子さん！　まアお上んなさいな！

（弘子）いゝえ、私此所の方が好いのよ。直き行くんですから……ねエ、幡子さん！　散歩に入らつしやらなくつて？

（幡子）ですから上野なら……來月になさる方がいゝのよ。

（弘子）何故？

（幡子）何故ッて事も無いけれども……

（弘子）先刻も變な事仰有つてネ。展覽會は來月だつて、來月のは美術展覽會でせう。

（幡子）弘子さん、美術お嫌ひ？

（弘子）いえ、嫌いな事無くつてよ。畫なんぞ見ること大好きよ。

（幡子）まア賴もしい。

（弘子）さう云やア幡子さん！　貴嬢お人が惡いのねエ。

（幡子）アラ、何故？

（弘子）内證で習つてらつしやるんですつてねエ。

（幡子）まア誰にお聞きになすつて？

（弘子）誰にも聞かないけども、私ちやんと知つてるワ。

（幡子）まア、それぢやアあの事も御存じ？

（弘子）え、知つてますとも、色田先生のお弟子なんでせう。

（幡子）知つてらつしやるなら、仕方が無いから、私何も彼も白狀しますワ。私、あの……思ひ切つて出して見たの。

（弘子）出したつて、何を？
（幡子）アラ、畫をてさアね。
（弘子）何所へ？
（幡子）まア、いやだ。ぢやア矢張り御存じないの？
（弘子）えゝ、その事ア初耳よ。
（幡子）アラ、そんならまだ云ふんぢや無かつた。
（弘子）云つたつていゝぢやありませんか。そんなら展覽會へ出品なすつたの子？
（幡子）エ、、でも内證よ。
（弘子）内證だつて、出りやア解るワ。何てエ畫題？　何を畫いたの？
（幡子）瓜を二つ畫いて、『眞理』つて題にしたの。
（弘子）何う云ふ譯？

（幡子）貴嬢も解らないのねエ。瓜の蔓に茄子は實らないッて云ふぢやありませんか。
（弘子）まア、先刻の考へ物よりむづかしいのねエ。
（幡子）そんなに解らないでせうか？
（弘子）ナニ、解らない事無いけども、何だか謎見たい子。
（幡子）そんな事云ふけども、畫題ッてものは大抵そんな風に付けるものよ。
（弘子）それぢやア南瓜を澤山畫いたら、『當り年』ッて題をつけるの。
（幡子）そんなのは平凡だワ。
（弘子）ぢやア糸瓜を一つ畫いて、『怠慢者』は何う？
（幡子）それなんざアまだ奇拔で無いワ。それより『眞理』なんて云ふ、高尚な題をつけておいて、何があるかと思ふと、瓜がたつた二つしか畫い

て無い。こゝが面白いんぢやありませんか。

（弘子）成る程奇拔は奇拔ねェ。きつと評判に成るでせうよ。

（幡子）てもまだ採否が極まらないから、それで毎日、新聞を氣にしてるんですワ。

（弘子）極まりやア屹度新聞に出るワ。そしていよ〳〵開會になりやア、また方々に批評が出るでせう。私、それが樂しみで成らないのよ。

（幡子）さうだと好いんですけどもねェ……

（弘子）大丈夫よ、心配する事ア無いワ。私もこれから新聞を氣をつけてませう。

（幡子）後生だから、氣をつけて頂戴！　そして私の名が新聞に出たら、直ぐに知らせて下ださいな！

ト、こんな話をして居る間に、女中のお七、茶を運んで來て、二

人に出し、一寸會釋して行かうとしたが、二人のこの話を耳に入れて、何を思ひちがへて、そのまゝ忙しさうに入る。間も無く皆代、奥から出て來て、

（皆代）オヽ、これは弘子さん！　よく御出でしたなア。

ト、云ひながら座につく。弘子は驚いて、席をはなれて禮をする。

（弘子）小母さん！　今日は！　よいお天氣で御座いますね。お變りも御座いませんか？

（皆代）ハイ〳〵、御蔭で機嫌好う致して居ります。貴孃もいつも御元氣で好いなア。さ、何卒これへ！

（弘子）ハイ、有難う御座います。

ト、仕方無しに緣からにぢり入て、座敷の中に席を占める。

皆代は、幡子を見かへりながら、

（皆代）時に、何の話ぢやつたナ。幡子の名が新聞に出るとやら？　全體それは何う云ふ事で？

ト、眞顏で尋ねる。幡子はギョッとなり、弘子の無造作に譯を云はうとするのを、急いで目配しながら、

（幡子）いゝえ、何でも無いんですよ。……そんな事何も云つてやしませんのですよ。

（皆代）でもお七が聞いたと云ふのぢや。飛んでも無い。小娘の身で新聞なんぞに、名を晒らされると云ふ事は、どうせ碌な事ぢや無い。コレ、幡子！　何ぞ心當りでもあるのか？　あるなら今の中に人を頼んで、取消しにやらなけりや成りません。

ト、ます〳〵眞氣に成る。幡子當惑しながら、

（幡子）だから何でも無いと云つてるぢやありませんか。お七はほんとに、餘計な事聞きかぢつて……

（皆代）イヤ、お七は若い者ぢやから、まさか聞き違ひと云ふ事もあるまい。

（幡子）いゝえ、全く聞き違ひなんですよ……只私が新聞見てたら、弘子さんが、その新聞に何が出て居るッて、一寸お聞きに成つた斗りですッ。……ねエ、弘子さん！

（弘子）左樣で御座いますとも！　私が只、新聞の事伺つた斗り……

（皆代）そんならまアそれで好いけれども……

ト、まだ腑に落ちぬ體。

（弘子）けども小母さん！　新聞だつて惡口書くと斗り極つちや居りませんよ。よく、感心な話やら、豪い事が紹介されて居ります。

（皆代）いゝえ、それもありませうが、今日まだ部屋住の、娘の子の事なぞ

は、決して書いて貰はぬがよいのです。よしんば褒められたとした所で、その新聞で褒められたと云ふ事が、却つて當人の毒に成るものです。それに此頃の樣に、ヤレ令孃鑑ぢやの、娘の評判ぢやの云うて、方々の娘さんの事を寫眞まで入れて麗々と出すのは、ほんとうに善くない事ぢやと、私は常から感心しませんのぢや。イヤ、出す新聞も新聞ぢやが、出される娘さんも娘さんぢや。あんな物に出されたが最期、入らぬ自慢氣が出て、虛榮が募つて、ほんとうに仕末に終へぬ樣になる。イヤ、第一私なぞは、舊弊者と云はれるか知らんが、今日部屋住の娘の子が、新聞を讀むからして面白う無いのぢや。此頃の新聞に、何一つ碌な事はありやせん。それを娘の子達が讀むと、惡い事斗り覺えてしまうて、役に立つ事は少しも無い。新聞を見んと世間が解らんと云ふが、娘の子は世間を知らん方が、却つて奧床しくてよいものぢや。——ドレ、そんな新聞

見んでもよろしい。これは私が持つて行きます。イヤ、弘子さん！これはつい小言を聞かせました。まアゆつくり遊んで入らつしやい！

ト、其所にあつた新聞を持つと、そのまゝまた奧へ入る。

後に兩人は顏見合はせて

(幡子) ネ、あれだから耐らないぢやありませんか。

(弘子) ほんとに段々恐くなるのねエ。

(幡子) 頑固ッたらありやしないのよ。只やかましい斗りで、恐い事アちつとも無いのよ。

(弘子) 只昔の方だから、思想がすつかり差ふのねエ。

(幡子) 何しろ學校も新聞も無い時分に、女大學一點張で育つた人なんてすもの……

(弘子) あの樣子ぢやア、よしんば貴孃の畫が展覽會で通つて、立派な褒賞

が付いて、世間の評判に成つたつて、決してお喜びなさらないでせう。

（幡子）けどもそこは人情だから、現在の自分の姪が、名譽て名を唱はれるのを聞いて、まさか腹を立てやしますまい。だから今度の事でもつて、あの頑固の思想を、どうか打破したいと思つてるのよ。

（弘子）まア大層な抱負ねエ。――然し頑固な思想ッて言へば、路子さんもやつぱりあんな方？

（幡子）いゝえ、まるて違つてますワ。尤もまだ子供ですけども、阿母さんたアまるでちがつて、矢張り新聞に出され度い方なの。御覽なさいな！先刻から考へ物て夢中に成つてるのも、實は賞品が取り度いのぢやア無くッて、雜誌に名が出して貰ひ度い斗りなのだワ。

（弘子）まア、それぢやア阿母さんとすつかり違ふのねエ。

（幡子）母子ても全く性質がちがふんですよ。

（弘子）アゝさうだと貴嬢大變よ。よくッて？

（幡子）何、何が大變？

（弘子）貴嬢の書題がいけなく成つて來るワ。

（幡子）ど、何うして？

（弘子）だつて考へて御覽なさいな？　瓜の蔓に茄子は實らないッて云つたつて、阿母さんに似ない路子さんが居られちやア、眞理たア云へないぢやありませんか。

（幡子）さうねエ、ほんとに然うねエ！　何うしませう？

ト、漸く不安の色を見せる。此所へ以前のお七、木皿に萩の餅を盛り、竹の小箸を添へたのを、三人前持つて其所へ出て來て、まづ弘子と幡子とに出し、あとの一つを、空いた席の前に置きながら、

（お七）お嬢様は何方で御座いませう？　路子さまは？

（幡子）知らないよ、奥だらう。呼んどいて！

（お七）はい！　申上げて參りませう。

（幡子）それからお茶を入れかへて！

（お七）畏まりました。

ト、お七は先刻からの茶盆を持つて、また入る。

（弘子）まア御馳走様ねエ。

（幡子）何所かゝら貰つたんでせう。

（弘子）ア、、もうお彼岸だから。

（幡子）そんな事何うでもいゝ……けどもねエ弘子さん、何うしませう？

（弘子）何を？

（幡子）何をッて貴嬢！　書題をさア！　今なら何うでも改められるから、

貴嬢考へて下ださいな！直ぐ會の方へ云つてやるから。さうで無いと、題が適つて無いからなんて、撥ねられてもしちや大變てすから……

（弘子）さうねエ。そんなら今の中に改めとく方がいゝわねエ。

（幡子）だから貴嬢考へてくださいな！　智惠を貸して下さいな！

（弘子）こんな事ア、書いた當人が考へなけりや駄目だワ。

（幡子）だつて私、あれでも三日三晩考へて、やつとの事で付けたんだから、もう腦味噌が空つぽに成つてるの。後生だから、助けると思つて智惠を貸して頂戴よ。

（弘子）よく方々から借りられるのねエ。私よつぽど智惠者と見えてねエ。

ト、仔細らしく頭を傾ける。

（幡子）ほんとに、何うしたら好いてせう。

（弘子）さうねエ、瓜が二ツあるのねエ。

（幡子）エヽ、さうなの！

（弘子）瓜二つ……そんなら『似た者』は？

（幡子）それは二つに割つた時の事でせう。

（弘子）オヤ〳〵、それぢやアいけない事ヲ。……お待ちなさいよ。……『狐の好物』！

（幡子）何の事？

（弘子）『おのが身の作りを喰ふ狐かな』ッて、名高い發句があるぢやありませんか。だから狐の好きな食物！

（幡子）何だか……それも變ねエ！……

（弘子）困つてねエ。……瓜！……瓜と……『瓜に爪あり、爪に爪無し』……

（幡子）何ですつて？

（弘子）いヽえ、こりやア何でも無いの……

（幡子）瓜がたつた二つぎり、他にやアわざと何も書かなかつたんですから……

（弘子）瓜が二つ……ウリ〳〵……瓜二、二瓜……あヽ、好い事があるヲ。

（幡子）何々？

（弘子）『おでんや』とするの？

（幡子）何うして？

（弘子）二瓜、煮賣り……いヽでせう。

（幡子）いやだ弘子さん！　そんな判じ物見たいな題！

（弘子）だつて書題つてものは、大方こんな風につけるつて、先刻も貴嬢が仰有つたぢやありませんか。

（幡子）なんぼ何だつて、そんな下司張つた題付けられやしないヲ。

（弘子）でも他に無いぢやありませんか。
（幡子）無けりやいゝ事よ。私やつぱし眞理にしとくワ。
ト、此所へ以前の路子、まだ考へ物が出來ない體で、雜誌をひねくりながら出て來る。弘子は見つけて、
（弘子）オヤ、路子さん、何所へ行つてらつしやつたの？
（路子）私お二階で、今まで一人考へてましたの。
（弘子）それで解答出來まして？
（路子）いゝえ、まだ！
（弘子）それは困りましたねェ。
（幡子）路ちやんの方もまだなの。私の方もまだよ。
（路子）マア、また何か、考へ物が出たんですか？
（幡子）考へ物ぢやァ無いんだけども、私の畫題があれぢやァいけなく成つ

て來たのよ。
（路子）會から何かさう云つて來ましてッ？
（幡子）いゝえ、まだ何も云つて來やしないけども、云つて來られると大變だから、それて今考へてるんだワ。
（弘子）所が好い題が付かなくつて困つてるんですよ。
（路子）眞理とか云ふんぢやャ、いけないんてすか？
（弘子）それが、いけなく成つちまつたんですよ。それつて云ふのが、貴孃と阿母さんと、あんまり性質が違ひ過ぎるから……
（路子）何てすつて、私と阿母さんと氣質がちがふッて、それて畫題がいけなくなつたの？　何だか變ねェ。何うしたの？　何うしたの？　エ、幡子さん！
（幡子）また聞き度がりが初まつたよ。

（路子）だつて畫題のいけないのを、また私の所爲にするんですもの……

（幡子）路ちやんの所爲でも何でも無いワ。只阿母さんと路ちやんと、ちつとも氣質が似てないでせう。さうして見ると、瓜の蔓に茄子が實らないッて云ふ事も、全く眞理とは云へなく成つちまつたから……

（路子）それぢやア私が茄子だッて云ふのネ。好い事よ〳〵！

（幡子）アラ、直ぐ路ちやんはさう取るから困るワ。

（弘子）オホヽ、氣の速い方ねェ。

（路子）いゝえ、好い事よ。私の居ない内に、二人でたんと惡口仰有い！

（弘子）アラ、さう氣をまはすもんぢやありませんよ。私達が惡口云ふどころか、先刻阿母さまが入らしつて、すつかりお說法伺つちまつたワ。ねェ、幡子さん！

（幡子）さうなの！　新聞の事ですつかりやられたの、路ちやんなんぞも、

そんな考へ物の答案ばかし考へて、雜誌に名を出し度がつてると、きつと今に叱られてよ。

（路子）だから幡子さん、貴孃もこの事內證にして頂戴よ。ト、此所へお七、又茶盆を運んで、それから一通の郵便を、幡子の前に出す。幡子取りあげて見て驚く。

（幡子）まア何うしやう？

（弘子）何所から來て？

（幡子）展覽會の事務所から……斷わられたんぢやないか知ら……？ト、心配さに封も開きかねて居る。

（弘子）はやく讀んで御覽なさいな！

（幡子）てもひよつと……

（弘子）そんなに氣に成るなら、私明けて見てあげる事よ。

ト、その封を開き、中を賣んで見て、

（弘子）ソレ、矢張り書題だワ。

（幡子）いけないんですッて？

（弘子）いゝえ、まアお聞きなさい！――『御送附の繪書結構とは存じ候へども、書題聊か不可解と存じ候間、單に靜物といたし置候、右御含み被下度、爲念得貴意候也』ですつて……

（幡子）單に靜物？……それでも可いのねエ。

（弘子）マアおめで度う！

（幡子）私、やつと安心してよ。一時は何だかと思つて……コレ、まだ胸がドキ〳〵してるワ。

（弘子）もう大丈夫よ。鑑別さへ通過すりやア、あとはもう此方の物だワ。おめで度う……何か驕つても好い事よ！　ねエ、路子さん！

（路子）ほんとに羨ましいのねエ。

幡子は急に元氣づいて、イソ〳〵しながら、

（幡子）驕る事よ、〳〵！　何でも驕つてあげる事よ。サ、何卒召し上つて！　丁度お茶も來ましたから、

ト、お七に茶を注いて出させ、先刻の萩の餅を進める。

（弘子）何うも有難う。では頂戴致します。

（幡子）さア何卒！……路ちやんは？

ト、云ひながら、幡子は箸で萩の餅を摘みあげる。弘子は居住を直し、左の手に皿を取りあげて、膝の上において食べかける。

路子は、まだ箸も取らずに居たが、この二人の樣子を見て、此時急に思ひ付いて、

（路子）アッ、解つた〳〵！

ト、跳ねる樣に座を立ち、

（路子）すつかり解つた。斯うよ〳〵！

ト、急いで机の所へ行つて、答案紙に書き始める、幡子は笑ひながら、

（幡子）何ですねエ、慌てくさつて……ほんとに考へ物が出來たの？

（路子）出來ましたとも〳〵！　もうこれに相違無いワ。

（弘子）よくそんなに急に出來てねエ。

（路子）てもちやアんと當つたんですもの。

（幡子）それぢやア何と云ふの？

（路子）五人の前へ出した卵を、四人は一個づゝ取つたんですけど、その五人目の人は殘り物なものだから、卵をお皿ごと取たのよ。それだから五人が一つ宛取つたのに、まだ一つお皿の上にあるんだワ。ネ、さうでせう。

それに違ひないワ、巧く當つたでせう。

（弘子）まアよく當つてねエ。だが、何うしてさう巧く考へがついて？

（幡子）ア、そりやア弘子さんの食べる所見てゞせう。

（路子）エ、、さうなの！

（幡子）それぢやア、やつぱり弘子さんに敎はつたんだワ。

（路子）さう云やアさうねエ、弘子さんの召しあがるのを見てたんだから。

（幡子）そりやさうよ、だから弘子さんにお禮をおつしやい！

（路子）弘子さん、何うも有難う！

ト、さも嬉しさうに云ふ。弘子は極り惡さうに、木皿を又下において、口の端を拭さながら、

（弘子）何う致しまして！

ト、禮をかへす。

僞幽靈

場所　水森家別莊の一室

人物

- 水森家娘　四三子
- 同　妹　五四子
- 同叔母　勝子
- 同女中　お谷

古びた別莊の一室と云ふ道具建。此所の縁近くに、四三子編物をして居る。

五四子、その側に座を占めて話をして居る。

（五四子）姉さま！　叔母さんは何時入らつしやるんでせうねエ？

（四三子）もう直き入らつしやるでせう。午後早々立つッて云ふお手紙だから、夕方までにやアお着きに成るでせう。

（五四子）そんなら今夜からは、もう恐かア無い事ねエ。

（四三子）さうねエ……でも叔母さんが入らしつたつて、出るものならまた出るでせう。

（五四子）アラ、いや、私恐いワ。

（四三子）恐がりねエ五四ちやんは！　まだ晝間ぢやありませんか。

（五四子）だつて晝間でも出るんですつて……谷やは此間も見ましたとさ。

（四三子）いゝ加減な事云つて、そりやア五四ちやんが喝かされたんだワ。あんまり恐がるもんだから。

（五四子）姉さまだつて臆病ぢやありませんか。此間なんぞ、まだ表は明る

いのに、お一人で二階へ行けないんですもの……

（四三子）ありやア雷が鳴つてたからだワ。

ト、云ふ時奥の方てガタンと音がする。四三子ビクリして、思はず五四子の方へよる。

（五四子）ほら御覽なさい、自分だつて……

（四三子）でも今變な音がしたワ。盜人ぢやア無くつて？

（五四子）いゝえ、鼠よ！　恐かア無い事よ。

（四三子）そんなら可いけども……

ト、まだ奥の方を氣にする。

奥の障子の陰から、お谷一寸顔を出して覗き、笑を耐へて直ぐ又隱れる。

（五四子）姉さま、盜人恐いの？

（四三子）盜人だつて恐いワ。

（五四子）雷も恐いの？

（四三子）えゝ、恐いワ。

（五四子）お化と何方が恐くつて？

（四三子）そりやア何方も恐いけども、恐さが又差ふのよ。

（五四子）私そんな物ア何ともないけれども、お化はたまらないワ。だつて雷はエレキでせう。盜人は人間でせう。それて正體が解つてるからいゝけれども、お化や幽靈は正體が知れないんですもの。何日何時出るか知れないんですもの……

（四三子）ほんとに左樣だねエ。

（五四子）それにねエ姉さん！　此別莊は變なんでスッてねエ……

（四三子）何が變？

（五四子）何でもお父様のお買ひに成る前、此所に住んで居た人が、此所で死んだんですつてねエ？

（四三子）まア……

（五四子）それに元と此邊は、淋しい〳〵所だつたもんだから、よく人殺しがあつたんですつて。谷やは此邊の者だから、よく知つてる事よ。

（四三子）もうお止しなさいよ！　そんな話。私何だか寒く成つて來るワ。

（五四子）恐けりや谷やを呼びませうか。

（四三子）でも臺所に御用があるんでせう。叔母さまが入らつしやるんで、御馳走の支度してる筈よ。

（五四子）でもしう濟んだから、私行つて呼んで來る事よ。

（四三子）アレ、五四ちやん行つてしまつちやア、私一人に成るぢやありませんか。

（五四子）ホ、、。姉さんの方がよつぽど恐がりねエ。ぢやア此所で呼びませう。

ト、聲をはり上げて、

（五四子）谷やア！　谷やア！

ト、呼んでも返事なく、何だか窃にひゞく樣に聞える。

（四三子）手を叩いたらいゝぢありませんか。

（五四子）私、そんな事出來ないワ。

（四三子）待つてらつしやい、かうして叩くのよ。

ト、四三子手を鳴らしても、音が出ない。

（五四子）姉さんも下手だワねエ。やつぱり行つて呼んで來てよ。

ト、又立ちかける。

此時奥の襖に、物の摺れる音がする。

五四子聞きつけて身を萎ませ、

（五四子）マア、姉さん〳〵！

（四三子）なアに、〳〵？

（五四子）變よ〳〵、變な音がしてよ。

（四三子）喝かしちやアいけないワ。

（五四子）いゝえ、ほんとよ、彼方で〳〵！

ト、襖の方を指す。

（四三子）ぢやア先刻の音の方だワ。やつぱり何かあるのよ、誰か居るのよ。

（五四子）幽靈でせうか？

（四三子）まさか……

ト、案じながら見つめて居る。

その中襖がゴト〳〵鳴り出す。

二人は氣味惡さうに手を取りあつて、

（五四子）何でせう？

（四三子）靜に〳〵！

（五四子）何うしませう？

（四三子）シッ〳〵！

ト、忍足にそつと身を除けやうとする。

其中襖がらりと明いて、お谷出て來る。二人は驚いて突伏してしまふ。

（お谷）お孃樣！　何しに居らつしやいますネ？

二人はその聲に顏をあげて、

（五四子）アラいやだ、お前なの？

（四三子）まア谷や！

（お谷）　えゝ、お前さまお召しになるから參りましたにョ。何の御用て御座りますネ？

（四三子）　何も御用ぢや無いけれども、お前もうお支度出來たの？

（お谷）　御馳走て御座いますか。もうあら方出來まして御座いますよ。

（四三子）　そんなら此所に居とくれナ！　淋しくつて何だが仕方が無いんだから。

（五四子）　さうしてお話でもしとくれよウ。

（お谷）　お話で御座いますかネ、よろしう御座います……

ト、中央に座り込む。四三子、五四子は左右に席を占める。お谷考へる眞似をして、

（お谷）　エゝト、何のお話致しますかネ？

（五四子）　何か面白いお話！

（お谷）　面白いお話なら、やつぱり此間の續きがよかんべいかネ。

（五四子）　此間の續きッて？

（お谷）　お安女郎が死んてから、時々出て來るつてお話でさア……

（四三子）　お止しよ〳〵！　そんなお話、私大嫌ひだワ。

（お谷）　オホゝゝ、それぢア他のに致しませうよ。オゝ、それ〳〵、此邊も十年前にやア、此家たつた一軒てネ……　イヤ淋しいものでしたよ。そこへお前さん、ある時旅の幽靈……

（五四子）　エッ？

（お谷）　ナニサ、旅の順禮がやつて來ましてネ、急病の差し込みて、苦しがつて居ましたつけが、誰もろくに世話してやんねエもんだから、とうとう苦しみ死に死んぢまひましたゞよ。

（四三子）　まア可哀さうにねェ……

（お谷）　さうするとお嬢様！　その氣が殘つたものと見えてネ、それからと云ふものは……

（四三子）　もうお止しよ、後は解つたよ。

ト、制しても聞えぬ風をして、

（お谷）　時々その幽靈ぢやアない、順禮の姿が見えまして……

ト、話す。四三子は耳を掩うてしまふ。五四子は恐いもの見たさと云ふ風て、ぢつとお谷を見入つて居る。

（お谷）　何でもちよい〳〵見かけますよ、あの白い衣服着てネ……その幽靈の順禮、……ぢやない、順禮の幽靈だつて云ふ事て御座いますが。

（五四子）　アラ、それぢやア又別の幽靈が出るんだネ。此間聞いたのと又異ふんだ？

（お谷）　えい〳〵、こりやア又別て御座いますよ。何だか此邊は幽靈の名所

てネ……

（五四子）　あら厭だ。

（お谷）　いゝえ、眞實の事で御座いますよ。むかしからよく云ひますが、東京の方では、箱根から此方、お化と幽靈は居ないもんだッてネ。すると又西の方でも、お化と幽靈は箱根から此方へ、決して出るもんぢやないと申すんでせう。て御座いますから、お化も幽靈も行き所がなくなつて、みんなこの箱根の山へ、立て籠つてしまふんて御座いますから、それて自然と此邊にやア、お化や幽靈が澤山居るんて御座いますよ。

（五四子）　まア大變なんだわ子。尤も山椒魚には、箱根で無けりや無いのがあるつて、學校の先生に聞いた事があるけども、幽靈が此所の名物だつて事ア、谷やに初めて聞くんだよ。ねエ姉さま！

（四三子）　何だか私にやア解らないから可い。

ト、まだ耳を閉いて居る。

（お谷）そりやァ然うて御座いませうとも、そんな事ァ學校の御本にだつて、出てる事ぢや御座いませんもの。でも私なぞは、稚い時分から馴れてるだからネ……

（五四子）まァ、そんなら澤山見たの？

（お谷）えゝ、見ましたですとも……！　此頃はさうても御座いませんが、私の子供の時分にやァ、日に三つや四つは、屹度見たもんで御座いますよ。

（五四子）アラ厭だ、晝間でも……

（お谷）晝間だつて、夜だつて、其所は魔物で御座いますもの……

（五四子）やつぱり晝間でも出るんだねェ。そら御覽なさい、姉さま！

ト、云ふと、四三子は頭を振つて、

（四三子）　お止しよ〳〵！　もう澤山！もう可いから彼方へ行つとくれ！
谷や私大嫌ひだワ。
（お谷）　ホ、、、何故て御座いますす？
（四三子）　何故つてお前、お化や幽靈の話ばかしするんだもの。
（お谷）　でも此邊の名物で御座いますから……
（四三子）　いやだつたら此人は！　直ぐ又その通り初めるんだもの。もつと氣の利いた、面白い、何か賑かなお話でもお仕！
（お谷）　でも、そりやア無理て御座いますよ。幽靈に氣の利いたのや、賑かなのは御座いませんよ。尤もお化の方になりますと子、豆腐買の一目小僧だの、傘の一本足だのッて、隨分面白いのも在りますがね。
（四三子）　アレ、もうお止しッてば！　止さないと打つよ。
ト、四三子は袂を振り上げる。

（お谷）オヽ恐い〳〵。お化よりお嬢樣の方が、よつぽど谷やは恐う御座いますよ。

ト、身を除けながら行つてしまふ。五四子は笑ひながら、

（五四子）アラ姉さん、本氣に成つて……オホヽヽヽアハヽヽ。谷やも弱蟲なだわねエ。アハヽヽヽオホヽヽ。

ト、頻りに興がる。

此所へ叔母勝子、庭口から入つて來て緣側に近づき、その體を見て不審さうに、

（勝子）コレ〳〵、何をお前達はふざけてるの？相變らずお轉婆だねエ。

ト、云ふので初めて氣が付いて、二人共緣端に出むかへ、

（四三子）アラ、叔母さん、入らつしやいまし。

（五四子）ちつとも存じませんで……

ト、狼狽へながら辭儀をする。勝子は上つて、會釋しながら

（勝子）もつと早く來る心算だつたけども、お午前には無據い御用があつて、つい今時分に成つちまつたの……

ト、云ひながら羽織を取つて、扇子を使ひはじめる。

（四三子）まアお暑う御座いましたらうねエ。お荷物は？

（勝子）今、車夫が持つて來るの。私捷徑をしやうと思つて、坂を歩いて來たもんだから……（ト息を切らせ）五四ちやん！　大急ぎで水をおくれな！

（五四子）ハイ、丁度サイダーが冷やしてありますよ。

ト、急いで次の間へ取りに行く。

四三子は有り合ふ團扇で、勝子を煽ぎながら、

（四三子）でも叔母さん、ほんとによく來て下ださいましたねエ。……私達二人で、ほんとに恐くつて仕樣が無いんですもの。

（勝子）兄さまは何うなすつたの？

（四三子）大磯の方が面白いつて、ちつとも來て下さらないんですもの。

（勝子）それは物騷だねェ。……此頃は新聞でも、隨分いやな事が續く樣だから、お前達二人ぢやア、さぞ氣味が惡からうねェ。

（四三子）それも只の氣味の惡いんなら、我慢の出來ない事は無いんですけども、ほんとに恐くつて仕樣が無いんですもの……ねェ叔母さん！　何だつて父樣は、こんな別莊をお買ひなすつたんでせう？

（勝子）そりやア お前、景色は好し、空氣は良し、普請だつてまだ確乎して居て、それで割がお廉いんだもの、お買に成るのは當然ぢやないか。

（四三子）それが叔母さん大變なのよ。

（勝子）何が大變なの！

（四三子）ぢやア叔母さんは御存じないのネ？

（勝子）何をさア？

（四三子）叔母さん！

ト、膝を進ませ、團扇使ひも其方退けにして、

（四三子）叔母さん！　此家にやア、恐い物が出るのよ。

（勝子）恐い物が出るッて？……あゝ、蛇が居るんだらう？

（四三子）いゝえ！

（勝子）ぢやア家が古いから、大きな百足でも出るのかエ？

（四三子）さうでも無いの！

（勝子）ぢやア何が出るんだねェ？

（四三子）お化が！　幽靈が！

（勝子）何だねェ、馬鹿々々しい！

ト、勝子は團扇を拾つて、自分で煽ぎながら冷かに云ふ。

（四三子）お化なのよ、幽靈なのよ！

（勝子）お前はまア、幾歳に成つたと思つてるんだねエ。高等女學校へても行つてる人が、今時お化だの、幽靈だのッて……人を馬鹿にお仕でないよ！

（四三子）いゝえ眞實なのよ、事實なのよ。

ト、熱心に訴へる。勝子はその顏を見て、又何か云はうとする時次の間から五四子、サイダーの罎とコップとをお盆に載せて持つて來る。

（五四子）どうもお待ち遠うさま。

ト、云つて勝子の側へ運び、

（五四子）私恐いから、この口姉さま明けて頂戴な！

（四三子）はア！

ト、それを引取りながら、

（四三子）恐いッてば五四ちやん、あの話眞實だワねエ。

（五四子）なんのお話？

（四三子）幽靈のさア！

（五四子）えゝ、眞實よ。ほんとに出るのよ。それでねエ叔母さん！

ト、その側に座り込み、

（五四子）此邊は昔から、お化や幽靈の名所なんですッてねエ。何だつてほんとにこんな所を、お父樣はお買ひなすつたんてせう？厭ぢやアありませんか。

（勝子）何だねエお前達は、揃ひも揃つて馬鹿な事云つてるぢやないか。私は昔時者だけども、そんなお化や幽靈なんぞ、何とも思つちや居ませんよ。

（五四子）　ぢやアまだ見た事無いの？

（勝子）　ホヽヽヽ、見た事なんぞあるものかネ。天から無いと思つてるんだもの……

ト、冷かに云つてサイダーを飲む。

（四三子）　そりやア見た事が無いもんだから、それてちつとも恐くないのよ。

（勝子）　見やうッたつて見られないぢやないか。第一無いものが見られるか

エ？それとも誰か見た者があるの？

（五四子）　エヽ、あるのよ、ねエ姉さま？

（四三子）　ハア、あるんだワ。

（勝子）　ホヽヽヽ、そりやアお前達が、あんまり恐い〳〵と思ふもんだから、何でも無いものを見て驚くんだよ。神經だよ。馬鹿々々しいぢやないかねエ。

（五四子）　いゝえ、私達ア、まだたしかに見たんぢやありませんが、ちやんとハツキリ見た者があるのよ。而も子供の時から、いくら見たか知れないつて……

（勝子）　ホヽヽ、何を云つてるんだねエ、お前達は！　この叔母さんをつかまへて、好い加減に冗談はお止しな！　叔母さんだつて忙がしい身體を、やつと脱て來てあげたのに、そんな下らない眞似をされるんなら、馬鹿々々しいから歸つてしまふよ。

（四三子）　アラいけませんよ、歸るなんて。

（五四子）　折角加勢に來ていたゞいたのに、今歸つちやア大變だワ。……そんなら私達も一所に行くワ。

（勝子）　だつてお前達が、あんまり馬鹿な事をお云ひだから……

（五四子）　だつて眞實なんですもの．　ねエ姉さま！

（四三子）決して冗談ぢやア無いんですよ。眞實の事なんですもの……ト、飽くまで眞顏で云ふ。その二人を勝子は見較べながら、

（勝子）さう。そんなら一體誰が見たと云ふんだエ？

（四三子）自家の谷やが。

（勝子）谷やつて……女中かエ

（四三子）エ、、此間から來てるんですが、此近所の者ですから、よく此家の事を知つてるんですよ。ねエ、五四ちやん！

（五四子）それでネ、叔母さん！　何でも昔此家で、死んだり、殺されたりした人があるんですッて。

（四三子）その幽靈が出るんで、谷やはもう五六遍見たつて云ひますよ。

（五四子）白い衣服を着た女の幽靈……聞いた斗りでもゾーッとするワ。

（勝子）女の幽靈？……白い衣服　それが何時頃何所へ出るの？

（四三子）私恐いからよく聞かなかつたワ。五四ちやん話してお上なさい！

（五四子）何でも臺所から入つて來て、お納戸の方へ行つて、それから女部屋の方へ歸つてしまふんですつて……だからもう私達は、滅多に臺所にも行かないし、お納戸なんぞ入つた事は無いのよ。

（勝子）女部屋と云へば、その谷やの居る所ぢやないの？

（四三子）さうですワ。

（勝子）よく谷やは恐がらないねエ。

（五四子）だつて子供の時から馴れてるんですもの。

（勝子）幽靈に馴れてるつて？　自分でそんな事云ふのかエ？

（五四子）エ、、まるで親類かお友達の樣に云つてるワ。

（勝子）親類やお友達どころか、自分が幽靈かも知れやしない。

（四三子）アラいやだ、叔母さん……まさか。

（勝子）まアそりやア可いとして……全體その幽靈は、何時頃出るッて云つたつけねエ？

（五四子）それが極まつてないんですよ。私は夜かとばかし思つてたら、晝間でも出ない事は無いんですッて。……だつて今聞いたワ。嘘だと思ふなら叔母さん、呼んで谷やに聞いて御覽なさい！

（勝子）いゝえ、お待ち……

ト、少し考へ、

（勝子）晝間でも出るんだつて？

（四三子）さうなんですッて。

（勝子）尤も增長した鼠は、晝間でもお座敷へ出る事があるから。

（四三子）鼠ならまだいゝけども……

（勝子）いゝえ、似た樣な者だらうよ。

ト、又少し考へて、小聲になり、

（勝子）それでその幽靈の出るのは、臺所から納戸の方だつて？

（五四子）さうよ、〳〵！

（勝子）納戸には何があるの？

（五四子）私達の衣服や何か、いろんな物が入つてるんですけども、それを聞いたら恐くつて、うつかり取りに行けなく成つちまつたワ。

（勝子）その他に食物なんぞもあるかエ？

（四三子）東京から送つて來た物も、みんな彼所へ入れる樣にしたんですけれども、もう恐くつて行けないから、何時でも谷やに出して來て貰ふんですの。

（勝子）さう、それで大方解つたねエ。

（四三子）でも叔母さんが來て下すつたら、何だか急に强くなつた樣ねエ。

ト、五四子を見かへる。五四子も頷いて、

（五四子）　さうねエ、もうお納戸へも行かれない事は無いワ。一人ぢやアま
だ恐いけれども。

（勝子）　さう、そんなら一寸行つて來て御覽なさいな！

（五四子）　アラ、何故？

（勝子）　さうしてお前達が、恐がつて入らない間に、何樣な鼠が入つてない
とも限らないから、直ぐに行つて檢めて入らつしやいよ。

（四三子）　さうねエ！五四ちやん何うしませう？

（五四子）　叔母さん一所に行つて下すつて？

（勝子）　私行つてあげてもいゝけれども、まだ晝間ぢやありませんか。……
それに谷やは何所に居るの？

（四三子）　お臺所で働いてるでせう。

（勝子）　そんなら大丈夫だから、二人て行つて入らつしやい。私は此所て待
つてゝあげる。

（四三子）　さう、ぢやア思切つて行つて見ませう。

（五四子）　ぢやア姉さま一所に！

（勝子）　さうしてよく檢めてゐらつしやい。で、何か異狀があつても、決し
て騷ぐんぢやありませんよ。

（四三子）　でも、ひよつと何か出たら？

（勝子）　何が出るもんかネ、それより何か紛失つてるかも知れない。それて
も谷やなんぞに云はずに、そつと來て私にお知らせよ！

（五四子）　ハイ、ぢやア行つて見ませう。

（四三子）　何だか氣味が悪いわねエ。

ト、二人は手を繋ぎ合つて出て行く。

勝子はその後を見送つて、

（勝子）ほんとに體ばかり大きくても、まだまるで子供なんだねエ。女中なんぞに喝かされて、ビク〳〵して居るんだもの。でも今の話の樣子で、大方幽靈の正體も知れさうだ。いや、何うしてもその正體を、見現はしてやらなけりやア……

ト、頻りに考へ込む。

此所へお谷、勝子の荷物を持つて、何氣無く入つて來て、

（お谷）オヤ、鎌倉の奥樣、入らつしやいまし。アノ車夫さんがお荷物を持つて參りました。これ丈で御座いますか？

（勝子）オ、御苦勞だつたネ。それ丈で可いのだよ。代はもう濟んでるんだから、お茶でもやつて歸へしとくれ！

（お谷）ヘイ、畏まりました。ではお荷物は此所に置きます。

ト、床の間にカバンを置いて、又出て行く。その時知らずに紙包みを落とす。

（勝子）ほんとにあゝして居る所は、全く山出しの正直者の樣だが……あれで油斷が成らないんだねエ。

ト、見送る中に、紙包に氣がつき、

（勝子）オヤ、何か落して行つた樣だよ。

ト、立ちよつて拾ひあげ、紙包を解いて見て驚く、

（勝子）アラ、これは此間私から、四三ちやんにやつた翡翠玉だよ。私にはもう要ないから、簪にでもお仕と云つてやつた……あれが何うして谷やの袂に？……ウン、いよ〳〵それでは化の皮を……

ト、獨り頷く時、四三子、五四子、何か話しながら、慌たゞしく出て來て、

（四三子）叔母さん〳〵！

（五四子）大變よ〳〵！

（勝子）今幽靈にお會ひぢやなかつたかエ？

（四三子）いゝえ、そんな物は出なかつたけども、その代り大變なの！

（五四子）姉さまの大切な物や、私のリボンやハンケチや！

（四三子）私ほんとに何うしませう？　大變な事しちやつたワ。叔母さまにいたゞいた物失しちまつたの。

（勝子）それ御覽な！……で、その他食物の方は？

（四三子）それもある筈のお菓子が無かつたり……

（五四子）梨の數が減つてたり……

（勝子）それはさうありさうな事だよ。

ト、落付いて云ふ。

二人には却つてそれが訝かしく、

（四三子）何がさうありさうなの？

（五四子）ぢやア叔母さん知つてらつしやるの？

（勝子）何も知る譯は無いぢやないか。

ト、態と物思はせ風にニヤ〳〵笑ふ。

二人は膝を摺りよせて、

（四三子）でも私……泣き度くなるワ。折角いたゞいた物失しちやつて……幽靈が持つてつたんでせうか？

（勝子）さうさねエ。

（五四子）私のリボンも然うでせうか？

（勝子）五四ちやんのリボンは知らないけれども、四三ちやんの翡翠玉なら、心配にやア及ばない、ちやんと取つて置いたから……

ト、云ひながら以前の紙包を出して見せる。四三子ギョッとしながら、

（四三子）まア嬉しい、何所にあつて？

（五四子）アラ、ほんとに何うして在つたの？

ト、二人共聲高になる。勝子はわざと聲を低めて、

（勝子）幽靈が置いて行つたんだよ。

（四三子）まア厭だ。何時何所へ？

（勝子）たつた今、此所へさア！

（五四子）ぢやア叔母さま御覽なすつて？

（勝子）はア、よく見たよ。

（五四子）ソレ、御覽なさい、眞實でせう!?

（勝子）眞實だねェ。私ほんとにあんな幽靈を、あり〳〵見たのは今日が

初度だよ。

（四三子）さぞ恐かつたでせうねェ。

（勝子）何が恐いものか子。私はちやんと口まで利いたよ。

（五四子）アラ、幽靈と？

（勝子）さうとも！

（四三子）で、その幽靈何樣な風？

（五四子）やつぱり白い衣服なの？

（勝子）白地は白地だつたけども、何だか中形があつた樣だ子。

（四三子）頭は散し髪でせう？

（勝子）隨分亂れちや居たけれども、あれでやつぱし銀杏返しだらうねェ。

（五四子）顏は何樣な？　蒼白で、痩せて？

（勝子）いゝえ、眞赤に、太つてたよ。

（四三子）　足の方は無いんでせう？

（勝子）　足が無いどころか子、……十三文も穿きさうだつたよ。

（五四子）　まア變な幽靈ねエ。

（勝子）　どうせ箱根の山の中のだもの……お尻なんぞは二抱へも……。

（四三子）　オホ、、！

（五四子）　アハ、、、そんな幽靈があるもんですか。

（四三子）　叔母さま、冗談云つちやいやよウ！

ト、又聲高になるのを、勝子は急いで制して、

（勝子）　靜にお仕よ！　まだ幽靈が聞いてるかも知れない。

ト、奥の方を指さす。

（四三子、五四子）　アラいやだ！

ト、身を寄せる。

（勝子）　ぢやア一寸耳をお貸し！

ト、是から二人の耳近く、小聲で先刻の樣子を話し、幽靈はお谷の虚構で、かうして二人を恐らせておいて、その間に物を盜み出すのだと、すつかり囁いてしまふ。二人はそれで漸く目が覺めた樣に、

（四三子）　まア酷い谷やだ。

（五四子）　何てエ憎らしいんだらう！

（四三子）　悔しいから何うかしてやり度い事ねエ。

（五四子）　私呼んで來て、酷い目に會はしてやるワ。

ト、立ち上らうとする。勝子また制して、

（勝子）　いゝえ、そんなにお騷ぎでないよ。

（五四子）　だつて私、あんまりだから、遺趣返し仕なげりやア聞かないワ。

（勝子）　その返報には好いことがあるよ。あの女中だつて、何もそんな惡黨ぢや無いんだらうが、只お前達の恐がるのが面白いので、ついそんな事云ひ出たんだらう。それにやつぱり年頃だから子、お前達の眞似が仕度さに、つい出來心で盜みもするんだ。然し惡い事ア出來ないもんで、塲所もあらうに私の前で、それを落したのが運の盡きさ。で、此證據があるからは、私にまア委せて御覽！これを目の前につきつけて、屹度尻尾を出させてやるから。

（四三子）　ぢやア叔母さんに委せますから、この仇を討つて下ださい！

（勝子）　その代りお前達も手傳つておくれ！

（五四子）　ハア、何樣な事でもするワ。

（勝子）　ぢやア五四ちやん、そのカバンを！

（五四子）　ハイ！

ト、床の間からカバンをぶ。

勝子はその中から、白地の浴衣を出し、

（勝子）　五四ちやん、それから御苦勞だが、お前の鏡臺貸しとくれな！……それから繪具もあるだらう？

（五四子）　そりやアありますけども……そんな物何になさるの？

（勝子）　何でもいゝから持つといてよ！今面白い事するんだから。

（五四子）　ほんとに何だか面白さうねエ。

ト、急いでそれ等を取りに入る。勝子はまた四三子に、

（勝子）　四三ちやんはお氣の毒だが、私の髪を解いとくれ！　どうせ洗はうと思つてた所だから。

（四三子）　はい、そんな事譯は無いワ。でも解いて何うなさるの？

（勝子）　今度は私が幽靈に成るんだよ。

（四三子）まア……、さうして谷やを喝かしてやるの？
ト、後へまはつて髪を解きかける。其所へ五四子は、鏡臺繪具を持つて來る。
（四三子）五四ちやん面白いのよ。これから叔母さんが幽靈に成るんですつて。
（五四子）まア何うして？
（四三子）さうして今度は此方から、谷やを喝かしてやるんですッて。
（五四子）アラ、さう、面白いわねエ、〳〵！
ト、喜び勇む。その間に勝子は、髪を解いて、白衣に着かへ、鏡臺に向つて顔を彩る、
（四三子）まア、お上手ねエ。
（五四子）何だかだん〳〵恐くなつたワ。

（勝子）一寸私とは見えまい。
（四三子）叔母さんだと思つても恐いワ。
（勝子）これでいゝから、こんな物は片づけて、谷やを此所へ來させなけりやいけないよ。
（五四子）ぢやア私呼んで來ませう。
（勝子）只呼んだんぢやいけないから、お前達は此所で、さも幽靈にでも會つた樣に、キャーッと云つて逃げ出してお出で！
（四三子）はア解りました。さう仕ませう。
（五四子）でも只ぢやアそんな聲は出ないワ。
（勝子）その前によく此邊を片づけて！
（四三子）ハイ、衣服は後に疊みませう。
ト、二人は手ばやく其邊を片付ける。

その間に勝子は屏風の陰にかくれ、不意にまた半身を出して、

（勝子）　うらめしや！

ト、作り聲で云ふ。二人は思はず、

（四三子）　キヤー、

（五四子）　アレー……

ト、襖を突きはなして逃げて出る。その體に笑ひながら、勝子はまた屏風の陰へかくれる。

此所へお谷は、

（お谷）　何でございますねエお嬢樣方！　恐い事は御座いませんよ。

ト、先に立つて恐々來ると、二人はその後から、笑を忍びながらついて來て、

（四三子）　でも其所へ出たんだよ。

（お谷）　だつて叔母樣が入らつしやいませう？

（五四子）　叔母さんは一番先に、お庭へ飛び出しておしまひなすつたワ。

（お谷）　ほんとに皆さま臆病だねエ。

ト、座敷の中央へ來て見まはす所へ、屏風の陰から勝子現はれ、

（勝子）　うらめしや……

ト、お谷の前へ出る。と、お谷は、

（お谷）　ワーッ、大變だア。

ト、其まゝ平太ばつて頭をすりつけ、

（お谷）　桑原々々……、萬歲樂々々！　南無阿彌陀佛、々々々々々！

ト、身を慄はせて拜みはじめる。四三子と五四子は、後で腹をかゝへて居る。

勝子はまだ作り聲で、

（勝子）どうだお谷！

（お谷）へ、へ、へ――い……

（勝子）お前はようも私達の、仲間の者の眞似をして、よく無い事を働いたナ……その恨みを晴らすため、いてや此ま丶引立て丶行くぞ。

（お谷）ア丶丶、ご、ご、御免下さいまし！……わ、わ、私が惡う御座いました。

（勝子）い丶やなか〳〵免されぬ。いて冥土へ連れて行かう。

（お谷）ど、ど、何卒御勘辨下さいまし！　今まで盜みました物は、皆出してお返し申します。

（勝子）そんなら直ぐに持つて來るか？

（お谷）へ、へ、へい〳〵、持つて參りは致しますが……た、た、只今は腰が立ちません……

ト、悶搔く。

（勝子）それでは後に返へすと致して、心ばかりは只今から、屹度入れ代るに相違無いナ？

（お谷）も、も、もう〳〵、きつと入れかへまして、決して惡い事は致しません。

（勝子）主人大切に勤めるか？

（お谷）身を粉に碎いて御奉公致します。

（勝子）屹度それに相違無いナ？

（お谷）決して嘘は申しあげません。

（勝子）もしまた嘘を申せば、容赦せず引立て丶、冥土では無い警察へ、連れて行くからさう思へ！

（お谷）エッ、警察へ？

ト、初て上を見あげて、幽靈の正體に氣が付き、一層吃驚して、

（お谷）　アレ、鎌倉の奥様！……あゝ恐入りました。

ト、平伏する。四三子、五四子出て來て、

（四三子）　オイ谷や！そんなにお前この幽靈か恐いの？

（五四子）　子供の時から幽靈には、あんなに馴れてると云ひながら……

（お谷）　でもこんな幽靈は、全く初度で御座いますもの。

（勝子）　コレ、まだそんな事をお云ひか？

ト、睨める。お谷驚いて、

（お谷）　ご、ご、御免下ださいまし〳〵

ト、又平伏する、皆々可笑しきこなし。

少女對話選　終

明治四十四年十月廿八日印刷
明治四十四年十一月　三　日發行

少女對話選　全一冊
定價金八拾錢

著者　嚴谷季雄

發行者　東京市神田區南乘物町七番地　田沼秀夫

印刷者　東京市牛込區市谷加賀町一丁目十二番地　青木弘

印刷所　東京市牛込區市谷加賀町一丁目十二番地　株式會社　秀英舍第一工場

發行所　東京市神田區南乘物町七番地　振替貯金口座東京第六九九番　誠文館

大賣捌　東京市神田區表神保町　東京堂書店
大阪市東區備後町四丁目　吉岡寶文館

不許複製

長夜燈下の好讀物

沼田笠峰先生著　山村耕花君畫

少女十二物語

四六版形頗美裝
極彩色石版口繪
木版彩色畫挿入
印刷中近刊

本書は少女子の美しき友情と、新らしき希望と、やるせなき惱みと、甘き思ひ出とを、さながらに描きたる可憐の物語なり。さびしき心に何等かの慰安を求めんとするものは、乞ふ速かにこの書を讀め！著者の溫かき同情は汲めども盡さざらむ。少女に對する同情と敎訓とは、實に本書の一大特色として誇るに足る。

發行所　東京市神田區南乘物町振替口座東京六九九番　誠文館

趣味と實益とを兼備せる寶典

巖谷小波先生
沼田笠峰先生　共編

（内容見本進呈往復はがきにて御申込あれ）

最新日本少女寶典

三六版總布製
頗美本全壹冊
紙數六百餘頁
定價壹圓廿錢

◎口繪
◎挿畫
◎裝釘

極彩色石版刷、三色版、寫眞版等數葉
木版彫刻密畫、寫眞銅版等數百個挿入
總クロース金文字、彩畫、頗優美上製

●五千部限り　特價金九拾五錢　郵稅金拾貳錢

此の書は少女が日常心がくべき事を始めとしまして、各種の學科、技藝、娛樂等其の他あらゆる百般の事項が收めてあります。學校にある方と、家庭にある方とを問はず、少女が常に座右に一日もなくてはならぬ寶典であります。文章は解り易く、二先生が口づから話すような書き振りて、趣味多く又製本の體裁も非常に高尚優美ですから、諸孃が書齋や机上の裝飾品ともなります。

發行所　東京市神田區南乘物町振替口座東京第六九九　誠文館

ト28D-49

巖谷小波先生選
細川風谷先生述

（現代有名畫伯挿畫）

通俗教育 お伽講談

菊判美本每卷讀切
定價壹册金拾貳錢
郵税各金四錢

▲第壹編……偉人 東郷大將……黑崎修齋君畫
▲第貳編……幼時の伊藤公……宮川春汀君畫
▲第參編……大石 良雄の頓智……山中古洞君畫

家の庭好夜資話料

巖谷小波先生の序に曰く……細川のをぢさんは、新講談の名人であります、今までは、おもに大人ばかりを前に置いてさかんに面白がらせて居ましたが、今度感ずる所あつて、進んで子供衆をも喜ばせやうと、新たに「お伽講談」と云ふものをはじめました。それはまことに結構なことで、私は子供衆を代表して、大いに賛成したのであります、（下略）……と。

發兌元　東京市神田區南乘物町
振替口座東京六九九番　誠文館